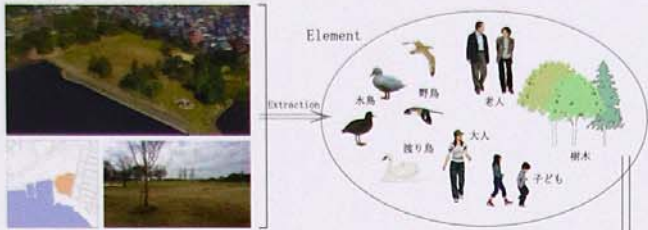


移りゆく四季と場、鳥。

設計手法 - ほどよい開き込み -

「広場に人が集まり、休み、楽しみ、遊び、様々な行事や催し物が行われる高には、その空間が自分達を大きく包み込み、適切に大ききで囲い込んでくれる空間であると感ぜられる必要がある」とは建築家・香山薫丸氏の言葉である。計画敷地においては全くそれが満たされておらず利用者が少ない。ここでは設計手法として香山氏の空間構成手法に基づき設計を行う。

計画敷地 - 自然と水鳥の手賀沼 -



敷地は利根川水系の湖沼、手賀沼に近い公園の広場。手賀沼は水鳥と渡り鳥を主に、西山の鳥たちが飛び交っている。現在、ただ広く何も無い緑を、鳥たちや人々が利用場所を求めてやってくるような目的のある場を作り変える。二者の間に在る木々が空間をつくり、人々はその空間を、鳥たちはその木々を保護所とし、木々を通して手賀沼を人と鳥の触れ合いと理解の場にする。

①ほどよい空間が限定されている



公園は開放的なイメージがあるが、広げれば広いほど良いわけではない。ある程度空間を限定することで心理的な安心感を得て、人々は思いと遊びを行うことができるだろう。

②開放感があり、多岐に利用できる仕掛け



大きな屋根をかけ、そこに穴をあけ、棚を植える。それだけの操作で空間を構成し、この屋根を連続的に配置することで利用のバリエーションを増やすことができるだろう。

③何気なく産れる仕掛け



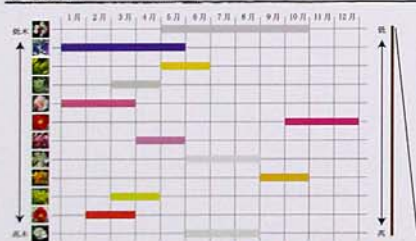
建築全体に産れる仕掛けがある。ベンチはもちろん、芝生、屋根、屋根の孔・縁、産れる場所を種子に限定せず、各々心懸よく産れる場所を見いださるだろう。

鳥と人が憩い、樹と人が出会う場所



手賀沼郷土資料館を主に、敷地全体に建築物が広がり、人々や鳥たちを招き入れ、憩わす。

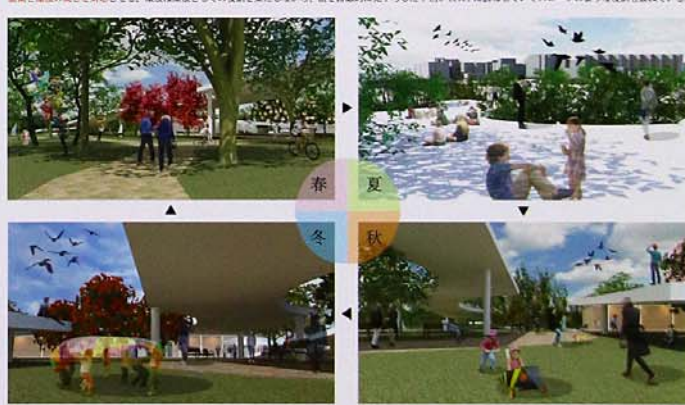
植栽計画 - 季節のスポット -



冬に葉が落ちない常緑樹を植えることで、ほどよい囲込みを可能にする。樹高と屋根の高さを対応させる。屋根は屋根としての役割を果たしながら、樹を俯瞰的に見下ろしたり Eye Level に調整していくスロープのような役割も果たしている。

それぞれ異なる季節ごとに花が咲く常緑樹を植える。年間を通して花の絶えない場を形成する。それが時期ごとの花見スポットとなり、人々はそれを目的に集う。また、樹木の特性を把握し、花を結果に成らせるための環境作りの一環として四枚の大屋根は着出し、それぞれの孔が持つ特性に木々の特性を当てはめて、植栽していく。以下は特徴ごとの配置例。

- ①シキミ 特徴：耐暑性・耐湿性がある。 配置例：水辺に植える。屋根の光を遮り、湿度を調整し、水質を浄化する。
- ②ギンヨウアサギ 特徴：耐暑性・耐湿性がない。 配置例：風の光を取り入れ、屋根によって北風を防ぐ。
- ③ダイサンボク 特徴：耐暑性が高く、花が咲く位置も高い。 配置例：高さから風を遮る。屋根の高さを調整して風を遮る。
- ④キンモクセイ 特徴：日当たりの良いと花つきが良い。 配置例：南向き、全体に光が当たるため中央の高きに植栽。



動線計画 - 空間変化のバリエーション -



- ①半開放
- ②社会的開放
- ③完全開放
- ④包む囲い
- ⑤広かな囲い
- ⑥包む囲い
- ⑦囲い
- ⑧完全開放
- ⑨包む囲い
- ⑩半完全開放

既存の歩道に新しい歩道を接続し、広場に新たな動線を作成する。その歩道を用いて行くと自身を取り巻く空間が徐々に変化し、突如へと変わってくる心懸を誘発させる装置として空間変化のバリエーションを設けた。手法として、四つの異なる屋根を横方向に並列させ、その下に歩道を接続させる。加えて屋根にそれぞれ異なる傾斜方向と高さをつけることで、多種多様なバリエーションが可能となる。

環境計画 - 鳥と人が介在する樹と屋根 -

